

「街路樹は街の顔」山口県景観アドバイザー 山中 信助

暑い陽ざしの8月初旬、三方山に囲まれ日本海に大きく開けている萩の町に有料道路から入ってみた。料金所を過ぎて下り坂の緑いっぱいの谷あいにはコブシの並木で眺望が悪い。折角の涙松が分かりにくい。JR萩駅を左にして大照院に向かうと、マロニエのなぜか凸凹した街路樹である。やがて、橋本川の水面と対岸のクロマツそして指月山との美しい調和が現れたら、ニセアカシアの街路樹がすばらしい景観の邪魔になる。

その街の良さは街路樹によって決まることが多いが、景観の良し悪しの判断には個人差が大きい。これらが、観光協会で頂いたパンフレットの言う「おいでませ 萩はロマンの城下町」と大きなギャップがある。せっかくの取組みが残念である。それぞれの街路樹は如何なものか。その点、椿大橋から松陰大橋・シーマーとへの道はラカンマキで統一され、落ち着いた歴史の深い萩の町らしくて私は絶賛したい。

そもそも萩城下町の通りには街路樹が無かった。やがて国道・県道が出来てから、人道車道と分けだして街路樹が植えられてきた。その時の配慮が足らなかったのが大きな原因と思う。出来ることなら植え替えて欲しいし、緑豊かな郊外に果たして街路樹が必要かどうか、一考を要するところである。誇りのもてる観光立市にするためには、全方位で考慮する必要がある。